

第一章 タイの概況と賭博

第一節 タイの概況

第一項 地理、歴史

タイの正式名称は Kingdom of Thailand (タイ王国) であり東南アジアに位置する立憲君主制の国である。1932年に絶対王政から立憲君主制に移行してからもなお国王の権力は絶大であり、クーデターや内紛が起きると、国王が混乱を平定する宣言が時折見られる⁷。

過去の王は、ムエタイの主催者になってムエタイを奨励したという逸話が残っている。現在のラーマ 9 世、プミポン国王からも、ムエタイやプロボクシングで優秀な成績を修めた選手やオリンピックの金メダリストなどには栄誉が贈られている (Fig1)。近年ではムエタイ選手が国王の側近になることはないが、近代以前はムエタイの強豪が国王を警護し、近衛兵として活躍していた時代があったという記録が残っている⁸。

気候は熱帯雨林気候に属し一年中温暖であるが、季節は大きく分けて、乾季、雨季、雨季がある。年間の平均気温は日本の夏季に相当する気温である⁹。その為、裸体で行う格闘技ムエタイは、室内外を問わず行うことができる。

タイの国土は 51 万 7000 平方キロメートルであり、形は象の鼻の形に似ている。民族は、大半をしめるタイ族の他に、華人、マレー人、インド人、ラオ族、モン族など、雑多に混成される他民族国家である¹⁰。その中で現在ムエタイの選手が一番大多数であるのはラオ族である。なぜならば、ムエタイの選手のほとんどは東北タイの最も貧しい地方の選手が多く、東北タイはラオ族が大多数を占めているからである。

一般的な見解としてタイ族の起源は、中国南部、雲南省の民族が移動してタイに定住するようになったと言う見解がされている。上東輝夫は、以下のように述べている。

「タイ族の発祥と先住の地については学説上も一定しておらず、ブエールに包まれた部分が多い。これら基本的にこれを証するに足る文献が乏しいことによるものである。しかしこのようなブエールの中にあって、学説上有力な見解としては、タイ族の先住の地は、中国大陸の浙江省北西部あたりであり、その後、タイ族は揚子江一帯に移住し、部族小国家群を構成したものとしている。」¹¹

以下同様に上東の研究を参考に述べる。タイ最古の王朝は、西暦 1238 年に起こったスコータイ王朝であり、中国資料によれば「暹国」である。スコータイ時代の王、ラムカムヘーンは、現在のスコータイ地方を中心に統治していたと言われる。まだ現在のタイと同じ

⁷ 村嶋 2003,p33

⁸ National Culture Commission , 1997 p16、 Prayukvong,2001 p28

⁹ 現代タイ事情研究会 1997,p12

¹⁰ 柿崎 2002、 p28

¹¹ 上東, 1982 p12

領土ではなく、メナム川沿いに領土を広げてルアンプラバンやビエンチャン（現在は双方ともラオス）も領土としていたが、北部のチェンマイ地方などは領地ではなかった。このスコタイ王朝は、現在のタイの領土的基礎になったこと、また、現在のタイの主要人種であるシャム族を上層階級とした国家であったことに現在のタイ王国との位置づけがされている。スコタイ王国のラムカムヘーン大王は、「祭事で行われるムエタイについては、これを伝統として賭博をしていても税金を徴収することはなかった。」¹²とされている。

続いて、スコタイ王朝が分裂すると西暦 1350 年にアユタヤ王国が起こった。中国資料によると「暹羅」である。アユタヤ王国は、西暦 1378 年には、残存していたスコタイ王国も支配下に治め、西暦 1413 年には、クメール帝国のアンコールまで征服した。アユタヤ時代の伝説では、ムエタイ戦士である王のソムデート・プラチャオ・スア（虎王）の物語と、ビルマ軍の戦士を何人も打ち負かしたというナーイ・カノムトムの伝説が残っている¹³。ビルマの侵攻を許した西暦 1767 年までタイは近隣諸国との紛争を繰り返しながら、ポルトガル、スペイン、日本、中国、オランダ、イギリス、フランス等と貿易を行い国際都市として繁栄した。日本の武士である山田長政が活躍したのもこのアユタヤ王朝時代の中期である¹⁴。

長期政権であったアユタヤがビルマ軍によって陥落した翌年、ビルマ軍との戦闘に参加していたプラヤータークシン（華僑名鄭昭）がビルマ軍に包囲されていたアユタヤを奪回し、西暦 1768 年にトンブリ王朝を築いたが、精神異常という理由から、部下に信望のあったチャクリー侯が王位に推され、チャクリー王の即位とともにタークシンは処刑され、トンブリ王朝は一代で終わった。トンブリ時代には、女子もムエタイをしていたという記録が残っている¹⁵。この時代のムエタイ伝説は、プラチャオ・タークシン王の部下のプラヤーピチャイダーブハックなるムエタイ戦士の武勇伝を残している¹⁶。

チャクリー王は、新首都をトンブリの対岸のバンコクに定めた。この王朝が現在のチャクリー王朝（ラッタナーコーシン王朝）であり、チャクリー王がラーマ 1 世である。

ラーマ 1 世の御世は、西欧列強の脅威に東南アジア諸国が怯えた時代であり、この頃にもムエタイの伝説が残っている。ムエンブランというフランス人を打ち負かした軍人の武勇伝である¹⁷。

タイの近代化は、西暦 1868 年にラーマ 5 世の即位とともに進められ、タイの伝統的な社会制度「サクディ・ナー」制（権威田制とも訳されている）の下での奴隷制の廃止などが西暦 1874 年に行われた。西暦 1932 年に、「六月革命」と呼ばれるクーデターが起こり、タ

¹² National Culture Commission 1997 ,p14

¹³ Prayukvong, 2001, pp50 ~ 51

¹⁴ 小和田 1989 ,p252

¹⁵ Monthienvichienchai 2004,p45

¹⁶ Prayukvong 2001,p52

¹⁷ Prayukvong 2001,p53

イは、専制君主制から立憲君主制に転換した。このクーデターは、王制を打倒するものではなく、王制の下で民主政体の樹立をその目的としたものであった。

タイが今の正式名称「タイ王国 (kingdom of Thailand)」にシヤムから変更したのは、西暦 1939 年の 6 月であり、ピブーン首相の軍国的な愛国主義によってはじまった「ラッタ・ニヨム」(愛国信条)の一つとして国名の規定がなされた。ピブーン首相は、第二次世界大戦中、日本に対して協力的な体制を取り、日・タイ同盟条約を締結していた。ピブーン首相は、ムエタイの代表的なスタジアムのラジャダムナンスタジアムを 1941 年に建設を始めている。この時代はタイのナショナリズムが旺盛な時代であり、愛国主義者であった彼は、タイの格闘技ムエタイを文化として保存するためにラジャダムナンスタジアムの建設を計画したのである¹⁸。現在のスタジアムのオーナー、ジャルンポン氏も「ピブーン首相は、ムエタイをタイの文化的な遺産として保存する目的を持ってラジャダムナンスタジアムの建設を計画し、タイが国際化していく中で外国人に誇れるタイ文化を奨励しようとした。」と語る¹⁹。

第二次世界大戦終結直前、ピブーン首相が失脚し日本が無条件降伏を行うと新しく政権をとったプリーディー首相は、日・タイ同盟を無効とし、対英・米宣戦布告の無効宣言を行っている。プリーディー首相らはタイでの反日的な態度の事例を挙げ、その結果「タイは敗戦国ではない」という立場が確保された。

第二次世界大戦後、タイは東南アジア諸国において比較的安定した政治状況を保っており、経済的な発展も著しい。特に目覚ましいのは、1985 年以降の経済発展である。工業面では、安い労働力を安価で提供できるタイに、日本を含め世界中から企業が進出し、外国からの投資ブームが始まる。タイ経済の研究者の末廣昭、南原真は、「一九八五年九月のプラザ合意以降の円高やアジア NIES 諸国の国際競争力の変化を反映して、大量の外国資本がタイに流入し、これにともなってタイの貿易構造や産業構造、さらには就業構造の変化が急速なテンポで進展している。」²⁰と述べている。プラザ合意とは、日本円の変動相場制への転換であり、1985 年がタイ経済の分岐点になったと見る研究者は多い。Pasuk Phongpaichit、Cris Baker の『BOOM AND BUST』では、タイの GNP が 1985 年に一人当たりの収入 22731 バーツであったのが 1996 年には、二倍以上の 50565 バーツになったと統計を出している。このようにタイ社会は、約十年で経済が著しい変化を見せた。その後、1997 年に経済金融危機に陥ったが、現在は穏やかな右上がりの成長に戻りつつある²¹。

¹⁸ 『Rajadamunm 60 pi』 2006,p70。

¹⁹ 2006.8.20 ジャルンポン総支配人 ラジャダムナンスタジアムにて。

²⁰末廣、南原 1991,はじめに。

²¹Phongpaichit、Baker 1998, p4。



Fig.1 (プミポン国王から榮譽を表彰されるチャチャイ・チオノイ選手 1973.4.17)

『Rajadamunm 60 pi』 2006 より

第二項 政治と宗教

石井米雄監修『タイの辞典』を参考にタイの政治と宗教を述べたい。タイは、先に述べたとおり立憲君主制の国である。国王は元首以上の存在である。「民族、仏教、国王」に絶対価値を置く「ラック・タイ」と呼ばれる支配イデオロギーに支えられ、国王は今なお権力の象徴である。国会は、任命制の上院と公選制の人民代表員の二院制で運営されている。陸、海、空からなる軍隊は、政治権力も大きく、歴代の首相のほとんどが陸軍最高司令官を経験している。ムエタイとタイの軍隊の関係は深く、ルンピニースタジアムなどは、タイの陸軍によって経営されている。またタイの軍人は、公務員でありながらムエタイでのプロ活動が特別に許可されている。地方スタジアムでは、軍人がジムのオーナーやプロモーターを兼ねている場合が見られるほどである²²。

宗教に関して、タイは仏教国として知られるが、法律上では信仰の自由が保障されており、タイ国王のみが憲法により「仏教徒であり、諸宗教の擁護者である」と規定されているため、95%の国民が信仰している仏教が国教と呼べるほどの権力を持っている。しかしタイ南部の四県、パッタニー、ヤラー、ナラティワート、サトゥーンは第一言語がマレー語であるイスラム文化圏であるため、イスラム教徒がほとんどである。その他、タイの各地には土地の精霊を祀るアニミズム信仰が根付いている。ムエタイの儀礼にもその特徴は反映され「闘いの舞い」などは、土地の精霊にリングへの入場の許可を求めるというアニミ

²² 1999.10.6 コンケン県のムエタイ興行は軍人に依るものであり、2000.6.30 パッタニー県のジムのオーナーも軍人であった。2007.8.24 ルークタパカージムのオーナーは、ソウルオリンピックで銅メダル、東南アジア大会 sea game で金メダルを取った後、タイ国陸軍の中佐になっている。 2007.8.24 チャティプロモーター50 歳は、空軍大佐でありながら、ジムの経営とプロモーターをしている。

ズム的な儀式と仏教的な呪文を唱える儀式が混合している。

石井米雄監修の『タイの辞典』では、「仏教徒 95.01%、イスラム教徒 3.83%、キリスト教徒 0.54%、ヒンドゥー教徒 0.01%その他 0.12%、不明 0.49%になっている。」²³タイ仏教は、日本の仏教とは異なり南方上座部仏教と呼ばれ、ミャンマー、ラオス、カンボジアなどと同じである。タイ仏教は、日本のような漢訳経典ではなく「南伝大蔵経」として知られるパーリ語経典である。世俗の生活を捨て、227の戒律を守り、剃髪し、僧衣をまとって生活する。また、タイ仏教の特徴に、男子がその一生の一時期、短期間出家する「一時出家」の習慣がある。

タイにおいて、仏教は賭博に対して比較的寛大であると見られる。『ギャンブルの社会学』を著した谷岡一郎・仲村祥一は、「仏教の古来の聖典の中には、ギャンブルについて書かれたものがいくつか存在するが、厳格に禁止したものは（たぶん）ない。したがって禁止されるか否かは、宗派の考え方によるところが大きい。」²⁴と述べられている。

National Culture Commission (1997)によれば、ムエタイは、スコタイ時代から賭博が伴われてきたと記されている²⁵。そのため、タイの仏教はムエタイ賭博を容認していると考えても良いだろう。筆者がフィールドワークで訪れたイスラム教を信仰するパッターニー県では、ムエタイ賭博を目にする事はできなかった。また、ムスリムのムエタイ選手とムエタイ興行が行われるスンガイコロークに行っても、公然と賭博は行なわれていなかった。スンガイコロークはタイの国土であり、ムエタイ興行の許可証が警察から発行されれば、公然とギャンブルが行える。しかし、これらのタイ国内であってもイスラム教圏では、やはりムエタイ賭博を目にすることはできなかった。

また、イスラム教のマレーシアではTMOI（トモイ）と呼ばれるマレーシア式のムエタイを行っている。（Fig2.3）ルールは、タイで行なわれているムエタイとほぼ同じであったが²⁶、賭博は認められてはいなかった。イスラム教では賭博を罪悪としている。先にあげた『ギャンブルの社会学』では、「コーランの第五章九〇節に次の言葉がある。「酒、賭矢、偶像、矢占いどれもいとうべきであり、サタンのわざである。それゆえ、これを避けよ。」²⁷と記されている。

このように賭博に対して厳しい立場をとるイスラム教では、「ギャンブラー達を集めるためのムエタイ興行」を行なうことはできないため、マレーシアでは過分にショー的な要素

²³ 石井 1993,p

²⁴ 谷岡・仲村 1997, p82

²⁵ National Culture Commission 1997, p14

²⁶ムエタイと同様にグローブを着用し、ルールもほぼ同じであるが、ビギナーが3ラウンド、エキスパートが5ラウンドであった。ムエタイと異なる部分は、選手の入場時の音楽があることや会場を盛り上げるための実況中継なども行っていた。タイでのムエワット(寺祭りでのムエタイ)と同じようなお祭りの雰囲気がある。ギャンブルは、目にする事ができなかった。2006.3.26 マレーシア コタバルで調査。

²⁷ 谷岡・仲村 1997, p82

が見られた。ルールは判定での勝敗がなく、相手を倒せなければすべて引き分けになるように規定されていた。賭博が行われていないので、勝ち負けを明確にする必要がないのである。

このようにイスラム教と仏教を比較すると、賭博という興奮を誘発する道具²⁸を持込みやすいのは仏教であり、そこでタイの仏教は、賭博に関して寛大であるという見方をすることができる。



(Fig .2,3 トモイ 2006.3.26 マレーシア コタバル)

第三項 貧富の格差

タイは、貧富の格差が大きい国である。タイの社会は、大きく分けて二つの社会を有するとも言っても良い。富裕階級と低所得階級である。1990年代に入り、都市中間階級とも言われる、高等教育を受けたホワイトカラーなどの人々が政治問題などの社会的な話題で議論されるようになった。都市では、かなりの割合を占める人数になりつつある。彼ら高等教育を受けたエリートサラリーマンは、収入の面で低所得階級とは所得金額に明らかに差異が大きく、彼らのような中間階級を富裕階級と考えるならば、タイの社会は、富裕階級

²⁸ 井上俊、亀山佳昭 編 1999,p183

と低所得階級の二つに分けられると言って良いだろう。タイは、それだけの貧富の格差を有している。田中忠治は、この格差を保護 被保護の関係として以下のように説明している。

「タイ国の保護 被保護関係は、アユタヤ王朝の 1454 年に制度として確立したサクディ・ナー（旧社会の制度）制度下での主従関係における、公的な人間関係として発現している。」²⁹彼は、タイ社会を基本的に二階層社会であるとみていて、サクディ・ナーという日本語では、サクディは位階、ナーは水田を意味することから位田制とか権威田制と訳されている。この制度は、現在にも影響を残し、富裕階級を支配者階級、低所得階級を被支配者階級として現在の社会にも影響を与えている。

同様にタイ社会の特徴を表わす研究に、上東輝夫は、以下のように説明している。

「現代タイ社会は、少数の支配層と大多数のものからなる被支配者層より構成された二元的社会である。近代市民社会の中産階級に相当する社会層は、国民の意識の上からも所得の分布の上からも未だ構成されていないとすることができよう。この現代のタイ社会の支配構造は、国王を頂点とし、王族・高級官僚・高級軍人・資本家の四者の連合体である。」³⁰と述べている。

こうしたタイ社会を扱った研究は、若干古く 1980 年代であるが、筆者も現代のタイ社会は、富裕階級と低所得階級の二元的な社会であることに同感しており、都市の新中間層は、彼らの意識は中流でも所得から考えると富裕階級に属すると言ってよいだろう。

さらに、綾部恒夫は、タイの社会構造を金持ちと貧しい者だけでなく、都市と地方社会で格差があり、支配者と被支配者の住む大都市バンコクと被支配者が住む地方社会を次のように説明している。

「バンコク（クルンテープとも呼ばれる）は、政治、経済、宗教、社会その他あらゆる分野について、タイ全土に君臨しているタイの頭脳であり心臓である。タイ人は、すべて、都市住民たると農民たるとを問わず、バンコクの文化的「優越性」を認めており、都会的、近代的であろうと望む地方の人々は、彼らの行動や服装その他の生活様式一般に関して、少しでもバンコクのそれに近くなろうと努めている。バンコクは地方に住む若者たちの憧れの的であり、タイのファッションは、すべてバンコクが発している。このようにタイ社会では、都市（首都）と地方の間に明らかな上下関係ないし優劣関係が存在するが、同時にバンコクの社会構造自体にも、一種の階級構造が見られる。国王と王族や昔の貴族の子孫からなる「貴族」の階級、政治家、専門職、大企業のリーダーなどからなるエリート集団、商人、中、小企業の人々、ホワイトカラーなどからなる中の上クラス、手工業や熟練労働者からなる中の下の人々、及び非熟練労働者、家事労働者、自動車三輪車の運転手やその他からなる中の下の人々の五つがこれである。他方、すでにバンコクの住民は、主としてタイ族系と華人系からなっているから、バンコクの社会構造を単純化していえば、五

²⁹ 田中 1988, p34

³⁰ 上東 1983, p82

つの階級かならなるヨコ軸と二つの民族からなるタテ軸が交差した形をなしていると考えることができるだろう。」³¹

上記を要約すると、富裕で近代的な大都市バンコクと貧しい地方社会、さらにバンコクの中にも支配者階級と被支配者階級の階級が存在する。ムエタイ選手は被支配社会階級からやってくる。ムエタイ選手のほとんどは、イサンと呼ばれる東北タイの貧しい田舎³²から都会へ出稼ぎに来ている。ムエタイという肉体労働のために出稼ぎに来ていると言っても過言ではない。この東北タイの貧しい農村出身者がムエタイ選手のほとんどであると言う事を Peter Vail と Pattana Kitiarsa は以下のように述べている。

Vail は、「東北タイ人は貧困からムエタイ選手の職業を選ぶ。」³³と述べ、Kitiarsa は、「ムエタイがプロスポーツとして確立してからは、ムエタイ選手は、みなタイの地方からやってきており、特に東北タイ出身である。」³⁴と述べている。

筆者がフィールドワークしたジムでバンコク出身の成人したムエタイ選手に出会ったことはない。これらのジムに所属するジムの選手のすべてが地方出身のムエタイ選手であった。特に多かったのは東北タイ（イサン地区）であり、続いて南タイであった。ムエタイジムのオーナーが中国人であるチュワタナジムでは、タイの様々な地方からの選手が集まっていたが、マイモンコンジム、ルークタパカージムはオーナーが南タイのナコンシータマラート出身であり、そのルートで全員が南タイの選手であった。ゲオサムリットジムは、オーナーの出身のチェンマイから、会長婦人の出身の南タイ、ナコンシータマラートに少年のムエタイ選手を残し、成長して強くなるとバンコクに呼び寄せ、試合に出場させていた。地方のムエタイ組織と中央バンコクのムエタイ組織を繋いでいるのである。

これらの事例は、選手が労働力として地方から中央のバンコクへやってくることを示している。筆者の調査では、バンコク市内でも少年ばかりのムエタイジムが存在したが、これらのジムには、バンコクに住む低所得階級の子供たちが集っていた。バンコクの東部にあるビッグショットジム（Fig.4,5）では、オーナーがレストランを営み、退官した警察官のコーソン氏がムエタイの指導に当たっていた。このジムの選手達は、ジムの運営ができないほどの低賃金のファイトマネーしか得られない少年選手達であったが、このジムのオーナーは、ムエタイのジムを営むのが長年の夢であって、商売が軌道にのってからタンブン（仏教で言う徳を積む）のためにムエタイジムを開いたと語る。同様にバンコクのクロントイスラムにあるソンブンジムは、同様に港の税務官がムエタイのジムを指導に当たっていた。彼らのムエタイジムで子供達を育てていく理由は、子供達に職業を持たせるためと覚醒剤撲滅のためであると話してくれた。

これらのジムに通う子供たちの親に話を聞くと、「ムエタイを勉強して子供達に強い子供

³¹ 綾部、永積 1982,p17

³² 赤木 1989,p14

³³ Vail 1998, p229

³⁴ Kitiarsa 2003, p33

になってもらいたい」「子供達に職業を持たせたい」と話してくれる親が多かった。ムエタイを自立のための教育的な機会であると考えているのである。子供達は、ムエタイの試合に出ることによって金銭を得ることができる。ビッグショットジムに所属している少年の事例では、一試合で大人が一日で稼げないような金額を稼ぐことができるのである。彼の父親は、バイクの便利屋の仕事をしており、一日の収入は、300 パーツから 400 パーツ前後であるが、15 歳の息子の収入は、一ヶ月一回の試合で、小さな興行なら 1000 パーツ、大きな興行で 3000 パーツを得ることができるという。彼らは、少年でありながらプロフェッショナルとして、十分にムエタイ選手として稼ぎ出す能力を持っているのだ。

上記のように貧しい少年を労働力として商売をするプロモーター³⁵は、中国人系のタイ人が多かった。タイは、中国からの移民が多い国である事はよく知られている。彼らプロモーターは、中国系タイ人であり、ラジャダムナンスタジアム、ルンピニースタジアムのプロモーターとしてムエタイビジネスを手がける。ワールドボクシング記者の青島律氏によれば、ラジャダムナンでは、13 人中 7 人が混血のない中国人であり、残りの 5 人が中国人との混血であった。一人のみ混血のないタイ人であった³⁶。ほとんど中国系ということである。彼ら少数の中国人が仲介となり、低所得階級のムエタイ選手を労働力として使っているのである。このように、今日のムエタイ選手は、貧富の格差社会から出現している。みな低所得階級から労働力として都市にやってくるのである。(Fig6,7)



Fig.4.5 ビッグショットジム (退官した警察官コーソン氏と子供たち、親は子供に教育としてムエタイを習わせたいと語る。)

³⁵ ムエタイの興行をビジネスにする興行主

³⁶ 2000.9.15 ワールドボクシング記者、青島律氏の御教示による。(次項に掲載)

(ラジャダムナンスタジアムの組織図) 2001.6 「Monthly Muaythai」 参考

チャルンポン・チオサクン 総支配人

シラデート・スアンナコン 支配人

プライ・パンヤーラック 事務局長

(プロモーター)

アンモー 華人

オーイ 華人

コンスーイ 華人

ロンチャワップ 華人

オートウー 華人

シンノーイ 華人

スイアダム 華人

チェマー 華人系

ギントーン 華人系

ブム 華人系

ソンチャイラタナスバン 華人系

ペットノーイ 華人系

ワンパデット タイ人



Fig.6 プロモーターと選手

(早朝の計量後的一幕、中華系タイ人であるソンチャイ氏と東北タイ出身のオロノー選手では肌の色に違いが見られるのが印象的であった。)



Fig. 7 ルークタバカージムの選手の部屋

(一般的なムエタイジムの部屋は、このように選手全員で寝泊りする状態である。彼らは、高校に通いながらムエタイを続けている選手である。毎日このような環境で日々のトレーニングを行っている。)

第四項 タイ人の価値観

第三項でムエタイの選手は、タイの地方の低所得階級の出身者であることを述べた。彼らムエタイ選手は、富裕階級の人間ではない。本項では、ムエタイの支持者であるムエタイファンは誰であるのかを考えたい。

筆者は、大学生やホワイトカラーと呼ばれる人達でムエタイに強い興味を示す人達に出会ったことがない。筆者は、1999年5月から二年間、タイ国立カセサート大学に留学していたが、大学生の間でムエタイの話題を聞いたことは少なかった。ムエタイを研究している筆者が積極的にムエタイの話題を聞き出さないとムエタイは、話題になることがなかった。タイでは高等教育を受けた人々、すなわち大学生などは、あまりムエタイに興味を示さないのである。カセサート大学人文社会学部日本語学科に在籍する学生16名にムエタイを好きであるかと質問したところ、1人の男子学生のみ好きだと答えた。しかし、スタジアムには行ったことがないと言う。テレビで見るだけであり、それも時々、父親がテレビでムエタイを見るときに一緒に見るだけだと言う。自分からは好んで見ることはないと言うのだ。また、カセサート大学の文化人類学を研究するアンボン教授(当時53歳女性)は、ムエタイを研究する筆者に「ムエタイはテレビのCMで見たことはありますが、試合自体はテレビでも見たことがない」と言っていた。彼女のような学者でもムエタイに対して関

心がないことが分かる。

一方、ムエタイの熱烈な支持者は、ホワイトカラーのような高等教育を受けたエリートではなく、日雇い労働者や運転手のようなブルーカラーと呼ばれる人々であった。

筆者は、1999年8月28日、テレビ局主催のムエタイの興行に出場した。土曜日の午後12時からの視聴率の高い時間帯であり、当時有名であった巷にいうオカマのボクサー、ノントゥム・パリンヤー選手と対戦した。(Fig.8)パリンヤーは、後に「ビューティフルボクサー」という映画の題材になったほど、強い選手として有名であった。

筆者のリングネームは「サムライ・カセサート大学」であり、日本からムエタイの研究に来た大学院生として宣伝された。「タイのオカマ対日本のサムライ」の試合は、翌日には、スポーツ誌やムエタイ新聞(Fig.9)で紹介されたが、次の日に、カセサート大学へ行ってもカセサートの大学生達は、筆者が昨日、テレビマッチでムエタイの試合をした日本人であったとは、誰も気付かなかった。タイの大学生は、誰一人として自分が出場したテレビマッチに興味を示していなかった。

しかしながら、校門の外では、バスに乗ってもタクシーに乗っても「君は昨日のオカマに負けたサムライ選手だね？」と声をかけられた。さらには、カセサート大学の校門前で屯しているバイク便³⁷の十数人の若者達には、身振りつきで、「お前の弱点はここだからこうしろ」とムエタイの技を教えられた。彼らは、いわゆる日雇いで働いた分だけ収入を得て生活している。彼らは、みな東北タイのロイエットからの出稼ぎであり、ムエタイの経験者が幾人かいた。彼らは、ムエタイ興行の情報をよく知っていて、選手の特徴などを詳しく知っていた。筆者は、彼らからムエタイの情報や近くにあるムエタイのジムの場所を教えてもらうことができた。これらのことからムエタイのファンは、高等教育を受けたホワイトカラーでなく、地方出身者のブルー・カラー(労働者)であると分かった。

それでは、ホワイトカラーは、なぜムエタイに興味を示さないのか、ということを考えてみたい。タイ社会の価値序列についてカセサート大学のパイトゥーン・クシアケウ教授は、彼の著作『タイ社会の形態と価値観の根底』の中で次のように述べている。この研究は、1981年であり、20年以上前の研究であるが、現在のタイの若者も、これに近い価値観を有していると見られるために引用する。

「チャオナーイになること 度量が大きく気前が良いこと 仏教心にあつく、慈悲深いこと 年長者を尊敬すること 恩義をわきまえていること 人妻、未婚の女性婦人と密通しないこと 僧侶、あるいは修道僧と恋をもて遊び、仏教を墮落せしめるようなことをしないこと 寺に入って仏道を学び、宗教的知識を持っていること 博識であること 勤勉であること 賭け事をしないこと。」³⁸

の「チャオナーイになること」のチャオナーイとは、高級官吏、高級軍人であること

³⁷ バイク便、モーターサイラップチャーンと言われるバイクに乗った便利屋で目的地まで送り届けて小銭を稼いでいる運転手である。

³⁸ 田中 1981,p72

を指し、富裕で支配者階級であることを指している。別言すれば、被支配者、労働者階級でないことを指している。この価値序列の最後の にあげられた「賭け事をしないことが」チャオナーイというタイ人エリートの基準になっているとすれば、賭博をする人間は、「理想の人物ではない」ということになる。しかしながら、ムエタイは、賭博とは切り離せない娯楽として存在している。

タイ研究者の松下正弘は、「金持ちの好むスポーツは、西洋型である。」³⁹と述べている。筆者が留学したカセサート大学では、運動部のほとんどが娯楽傾向のある部活動であって、厳しい訓練やしごきのある部活動は目にすることがなかった。テニス、バスケットボール、サッカーなどが盛んな部活動であったが、筆者から見て日本における大学の体育会のような練習量や勝敗に対する意気込みは感じられなかった。また、カセサート大学にも、ムエタイ部はないがボクシング部が学校認定の部活動として存在した。しかしながら、カセサート大学のボクシング部に所属する選手たちは、元々プロのムエタイ選手であった。

例えば、高校時代にルンピニースタジアムのチャンピオンになった学生やランキング1位まで登りつめた選手が推薦入学でカセサート大学の教育学部体育学科に入学し、アマチュアボクシングでオリンピックを目指していた⁴⁰。ムエタイ部でなくボクシング部であることからカセサート大学も西洋型の理想を描いているように見受けられる。このボクシング部の選手全員は、大学からアマチュアボクシングを始めたのではなく、全員が元プロムエタイ選手である。彼ら部員は、「アマチュアボクシングの成績を残すために特別な推薦制度で大学に入学してきた」と語った。アトランタオリンピックで金メダルを取得したソムラック・カムシン選手も、元プロムエタイ選手で、カセサート大学に入学し、アマチュアボクシング部に所属していたが、中退し、軍人を続けながらアマチュアボクシングを続けた。ついにオリンピックで金メダルを取得でき、国王やタイのスポーツ協会から多大な報奨金を得ることができたのである。

先にタイ人の価値観がチャオナーイになることであると述べたが、このチャオナーイは、自ら手を汚すことをしない。自ら手を汚すことがチャオナーイでないとしたら、苦しい訓練を必要とし、ギャンブラーから賭けの対象にされるムエタイ選手は、チャオナーイではないという事になり、理想の人間のすべきことではないということになる。先にあげた Pattana kitiarsa の『Lives of hunting dog』は、ムエタイ選手は飼い主に忠実な猟犬であるとして、ムエタイ選手の人生などが述べられている。ムエタイ選手は、どれだけ、富と名声を得ても、養われているという事実は変わらないのである。チャオナーイを目指している高等教育を受けたエリートや富裕階級にとって、ムエタイ選手はいくら金銭的に裕福であっても権力を持ったチャオナーイという理想の人物像からかけ離れていると言える。これらのことが示すように、ムエタイを支持する多くのファンは、高等教育を受けたエリ

³⁹ 松下 1995 ,p179

⁴⁰ ルンピニースタジアム 元フライ級チャンピオン ペット・マイモンコン、同スタジアム スーパーバンタム級 1位 スーパーボーイ・ラクジョアーなど

ートや富裕階級ではなく、選手と同様に低所得階級の人々である。



Fig.8 1999.8.28 ノントウム・パリンヤー v s サムライ・モー・カセサート
(土曜日の午後 12 時にチャンネル 3 で生放送された。筆者の留学していたカセサート大学でムエタイ中継を見ていた学生には会うことがなかった。)



Fig.9 (1999.8.29 試合翌日のムエタイ新聞ムエサーム的一面、「日本人は泣くノントウムはルール違反」という記事が掲載された。また、その他のムエタイ情報誌でも試合の結果が報道された。このような試合の様子を大学の近隣のバイク便の運転手やタクシーの運転手が詳しく知っていた。)

第二節 タイの賭博

第一項 賭博の嗜好

タイ人と賭博は切り離せないものである。タイ人がスポーツ観戦をしている所では、必ずと言ってよいほど、賭博をしているのを見かける。スチットウォンテートは、タイ人にとってスポーツと賭博が切り離せない状態にあることを以下のように説明している。

「タイでは競技と賭博は不可分である。勝敗を決するところに、賭博がある。国王が儀式として行った運勢を占う競艇も、両岸の見物客にとっても賭博の材料であった。「シャム(タイ)人の博打好きは自分の身や妻子も賭け、負けると奴隷になるものも現れるほど」と書いたのは17世紀末にアユタヤを訪問したフランス人神父ド・ラ・ルベールであった。同じ頃の韻文学『サムタコート・カムチャン』には、頭突き競技、闘牛が登場するが、必ず賭博がついている。全国的に知られた民話『シータノンチャイ』の主人公も博打で死んでしまう。闘鶏は古くからあり、シャム(タイ)から軍鶏シャモが江戸時代に渡ると、日本でも闘鶏は賭博になっていた。他に闘魚も盛ん。～中略～賭博行為に対しては、政府の取り締まりは、厳しく、政府公認の賭け事は、バンコク市内の競馬がある。マージャン、トランプ、闘鶏は賭博行為とみなされ、許可を受け納税しなければならない。実際に、ボクシング、ゴルフ、ボウリングなどの競技に賭けがなければ面白くないと言うのがタイ人の思いである(訳:吉川利治)。」⁴¹

賭博は、ムエタイにも必ず伴うが、近年ではサッカーのテレビ中継を見ながら賭博をしているのをよく見かける。筆者が留学していたカセサート大学の寮では必ずと言ってよいほど、サッカー中継が行われていると学生たちが歓声を上げてサッカー賭博に興じていたし、ムエタイの試合が行われているムエタイのスタジアムでも、ムエタイではなくイギリスで行われているサッカーの衛星放送の情報を聞きながらサッカー賭博に興じているギャンプラーたちをよく見かける。しかし、このサッカー賭博は違法である。タイでは、2006年に行われたワールドカップサッカーでも約1600人の逮捕者を出している⁴²。これはタイにおいてサッカー賭博が流行している事を表わしている。

タイで賭博は、1935年に政府公認の競馬を除くすべてのギャンブルが禁止されているが、例外的に合法になるものは、一日を越えない許可証を警察から発行されている場合に例外的に認められるものである⁴³。

さらに、バンコク市内のムエタイスタジアムであるルンピニースタジアムとラジャダム

⁴¹ 石井 1993, p239

⁴² 「Peoples daily」2006.July.13

⁴³ Phongpaichit, Priyaransan, Piriyanansan, Treerat 1998,p216

ナンスタジアムは、例外的に合法賭博場として認められている⁴⁴。ムエタイスタジアムでの賭博や闘鶏場での賭博は、第三章で詳しく述べるが、政府の特別な許可で合法化されているのである。これらの特別な許可を得て合法化しているものと違法な賭博もタイでは種類が多く、間に隠れて盛んに行われている。

タイで違法な賭博が盛んに行なわれているのを示す研究に Pasuk Phongpaichit らが研究した『GUNS GIRLS GAMBLING GANJA』1998 があり、その結論の部分において、「タイの違法な経済収入は8%~13%のGDPと同様の範囲であり、これらの大部分を占めるのは、売春に続いて、ギャンブル(カジノ、地下組織の宝くじ、サッカー賭博)である。そして、その他の違法な経済収入は、薬物の売買と武器の密輸がその半分であり、人身売買や石油の密輸は相対的に少ない。」⁴⁵

と述べられている。このように、タイの違法賭博がタイの国内総生産の大きな部分を占めていることから、タイ人の違法賭博が如何に盛んであるかが理解できる。以下に合法、違法含めてタイの代表的な賭博の種類をあげる。

闘鶏(登録制合法)

宝くじ(合法と違法)

カジノ(違法)

サッカー賭博(違法)

ポートルース(祭りの時は合法)

競馬(バンコク市内で許可されたものは合法)

闘魚(登録制合法)

闘虫(コオロギやカブトムシ)(登録制合法)

⁴⁴ ルンピニースタジアムがタイ陸軍の経営であり、ラジャダムナンスタジアムは、王室の関連会社の経営である

⁴⁵ Phongpaichit, Priyaransan, Piriyanansan, Treerat 1998,p258

第二項 法律の柔軟性

タイでよく言われる格言に『タン・サーイ・クラン（ほどほどに）』という言葉がある。これは、厳しすぎても良くなく、緩過ぎても使えないと言う意味で、適当な事が一番良いとされている。賭博に関する法律もこの「適当」の観念を中心にして、かなり柔軟性が存在する。

賭博に関する法律は、1935年にバンコク市内の競馬場を除いてすべて違法であると規定しているが、警察署に一日を越えない賭博場の許可証を提出すれば、闘鶏やムエタイ競技場を簡単に開催することができる。このムエタイ競技場を設営するのは、賭博の許可証やリング、赤と青のグローブの一組を用意して賃貸する会社があり、トラックでリングを設営し、テントを張り、さらにムエタイ賭博の許可証をレンタルする商人さえ存在している⁴⁶。このように、賭博場のライセンスが税金を支払って簡単に経営できるシステムを持っているのは、タイ特有の法律の柔軟性と言ってよいであろう。

また、ムエタイ賭博はスタジアムにおいては合法の賭博である⁴⁷。しかしながら、第一章、第一項で述べたように、ムエタイはスコタイ時代のラムカムヘーン大王も祭りで行われるムエタイは賭け事として見なさずに、伝統として税金を徴収することはなかったとされる⁴⁸。これらのことから、ムエタイ賭博に関する規制は厳しくないと言ってよいだろう。ただし、本来の法律では、ムエタイに限って賭博が許されているのも例外的合法地帯であるスタジアムの内部だけである。しかし、ムエタイスタジアムの外部でもラジオやテレビを見ながらムエタイ賭博を行なっているし、スタジアムに来ることのできない、地方都市などでは、「BOXING ROOM」（タイ語でホン・ドゥー・ムエというムエタイを見る部屋）と呼ばれる、テレビとひな壇場の座席があるギャンブラーだけを集める店（第三章、第一節、第四項参照）も存在する。ここは、スタジアムではないので違法であるが、店主は、警察にお咎めを受けたことは一度もないと言う。店主は、私的な管理費を警察に支払っているが、支払っていない場合でも、ムエタイ賭博では警察の厄介になる事はないと言う。

フィールドワークで訪れたチェンカン県のコックギン村では、いつも土曜の正午になるとチャンネル3のムエタイテレビ放送を見て賭博をするために、村人は、賭博好きの集まる家に集合すると言う。毎週に決まったメンバーで集まるが、この村では、ムエタイ賭博で逮捕されたことは一度もないと言う。賭け自体が小額の、20 バーツ（約 60 円）程度のものであるが、同じような小額でサイコロ賭博をしていたら、密告により一人 2000 バーツ（約 6000 円）の罰金を課された例はあるが、ムエタイ賭博では逮捕された事は一度もないと言う。

ムエタイの賭博は、伝統であるということだけではなく、興行が軍人や権力者によるも

⁴⁶ Vail 1998, p125

⁴⁷ Vail 1998, p151

⁴⁸ National Culture Commission 1997, p14

の多いことも目こぼしにあずかる理由でもある。タイでは法律よりも権力者の意向が大きいようである。さらに、この村では、葬式の時などにサイコロ賭博が行われて、その収益金の一部を喪主に寄付するという支援のような賭博が行われるが、このような時もギャンブルの許可を取らなくても警察は黙認していると言う。

第三項 タイ人の賭博観

タイでは、仏教の業(カルマ)の観念があるために、良いことをすれば良いことが起き、悪いことをすれば悪いことがおきると考える。これは輪廻転生(生まれ変わり)と同じであり、前世で良い事をすれば現世では良い人生が送れ、前世で悪いことをすれば現世で悪い人生になってしまうという観念である。現世においても、良い事をすれば、良い事が返ってくるという仏教思想である。このようなタイの観念を Vail は、タイ仏教と賭博の勝利への期待に結びつけて考えている。彼は、多くのタイ人がなぜ、賭博に熱狂するのか、タイの文化と結びつけた公的な理解はされていないが、タイ人のギャンブル好きな特性をカルマの不確実性と仏教の宇宙観として位置づけてみたいと述べている⁴⁹。

筆者の友人のムエタイ選手が「試合の前にワット・ラカン(鐘の寺)に行き、タンブンしたい(徳を積みたい)」と言った。この寺は、スズメや亀、小魚をあらかじめ捕まえておき、参拝者にこれらの動物を売る。そして参拝者は、これらを川に逃がすのである。これらは、タンブンの一種であり、捕らえられている動物を逃がしてやることで徳を積むことになるという。そうすると幸運が訪れ、試合に勝てるという図式である。これも仏教の宇宙観である。これらの良い事をすれば、良い事が返ってくるという考え方もタイ人の賭博観に反映されているようである。また、目の見えない人や身体の不自由な人には、宝くじ屋が多く、宝くじを買う人にタンブンを求める。つまり、このように身体の不自由な人から宝くじを買ってあげることが、タンブンをやる事になるのである。

タイ人は、賭博を、第一節、第四項の「タイ人の価値観」で述べたように、徳のある人間のすべきことではないと考えている反面、人助けにつながるのならば良いことであるとして、「自分の良い行動の確認になるならば、賭博によって金銭を欲するのも良いことである」と考えているかのように見受けられる。また、タイ人は「金持ちは株を買い、貧乏人は宝くじを買う」と言う。貧乏人も金持ちも賭博に関する興味は強いが、金銭の所有度で賭博の種類も異なる。サッカー賭博などは、インターネットなどの情報を操作できる大学生やサラリーマン、公務員などの大きな組織に属する教育を受けた人間が中心に行っているが、ムエタイ賭博などは、タクシーの運転手やバイク便の運転手が中心となっていて行なわれている。なぜなら、ムエタイ賭博は、ホストギャンブラー(胴元になる親)がいなくて

⁴⁹ Vail 1998, p152

も個人対個人で行うことができる上に、通信機械や銀行振り込みの手続きがいない、現金さえあれば手軽にできる賭博だからである。